

初年次教育におけるダイナミックな学習環境の構築に向けて*

城 間 仙 子**

Abstract

Year 2013 was the second year since the English Department of Okinawa Christian Junior College introduced “Freshman Seminar” as its freshman education. Reflecting on how the course was managed in the first year, the teacher must admit, despite the fact that the most of the students benefited so much from the program, that the program might could fallen into what is called “add a course strategy”. It was fortunate for the 2013 program to have been able to collaborate with various other in-house programs, which as a result confirmed that many of the preceding studies of learning environment and collaborative learning are true and can be applied to the freshman education at OCJC English department.

1. はじめに

初年次教育への本格的な取り組みの中心として本学（沖縄キリスト教短期大学）英語科で「フレッシュマン・セミナー」を開設して2年目を迎えた。1年目の課題と反省をふまえ、検証と研究を行うなかで出会った Tinto (2005, p. 1) による以下の指摘は、まさに今後のプログラムのあり方を検討する上での示唆を与えてくれた。

... most institutions do not take student retention seriously. They treat student success, like so many other issues, as one more item to add to the list of issues to be addressed by the institution. They adopt what Parker calls the “add a course” strategy in addressing the issues that face them. Need to address the issue of diversity? Add a course in diversity studies, but do not alter the nature of institutional climates. Need to address the issue of student retention, in particular that of new students? Add a freshman seminar or perhaps a mentoring program, but leave untouched the educational character of the first year.

（筆者訳）ほとんどの大学では、学生のリテンションを真剣に検討していない。学生の成功については、大学が取り組むべき多くの課題の中のひとつとしてしか扱っていない。これら大学は直面する課題に取り組む方法として、いわゆる Parker の「科目の追加」戦略をとるのである。学生の多様性という課題にどう取り組んでいるかということ、多様性に関する科目を開設する。しかし大学環境の本質を変えることをしない。学生の、特に新入生のリテンションという問題にどう取り組んでいるかということ、フレッシュマン・セミナーやメンター・プログラムを開設する。しかし初年次教育の教育的特性については手を付けぬままなのだ。

*Managing a Dynamic Learning Environment for Freshman Students

**Senko Shiroma

本学英語科の初年次教育に関しては、今年度は新規の教育プログラムや既存プログラムへの新しい取り組み、また本学の事務組織の改変も手伝って、結果として昨年度と比較するとダイナミックな初年次教育のスタートを切ることができた。更なる改善を目指して、ラーニング・コミュニティの創造や協同学習などを意識的に取り入れて学びの活性化に向けた可能性を探りたい。

2. 初年次教育について

ユニバーサル・アクセスの時代にあって、また様々な入試形態を経て、多くの大学・短期大学では多様な学力やバックグラウンドを持つ学生が入学していることから、学生の質の変化および多様化が共通の課題となっていることは、すでに筆者の前稿で述べた（城間 2013）。全国的に、多くの大学・短大では、「学生の質の変化」や「学生の基礎学力の低下」について論じられ、また大学における学びの環境に適応できない、あるいは適応に苦しむ学生が増えている。この状況の解決策の一つとして、現在、多くの大学・短期大学で初年次教育が導入・実施されている。

1970年代後半のアメリカで本格的に脚光を浴び始めた初年次教育は、当時のアメリカで顕在化し始めた高等教育の大衆化と関係している。この辺りから初年次教育科目は「フレッシュマン・セミナー」と呼ばれるようになり、その内容も多様化した入学生に対し、「教育方法も学生を主体にしたプレゼンテーションやコミュニケーションなどを多用し、読み書き、情報検索、討論、発表などのアカデミックスキルや大学生活の基本的スキルを身につけることを目標として、時間管理法や就職支援、ならびに友人や教員とのつきあいを円滑にするための人間関係、コミュニティ活動、職業選択に関連する包括的な内容で構成されるようになり、現在でもこうした内容は基本的な『ファーストイヤー・セミナー』の定番として定着している」（山田 2005、p.13）。

日本における初年次教育については、文部科学省（2011）は高等教育局が発表した「大学における教育内容等の改革状況について」の中で「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」と定義づけている。

3. 本学英語科の初年次教育

(1) フレッシュマン・セミナー以前

短期大学英語科の学生は、2年間で英語科からの専門科目（卒業要件46単位）と、総合教育系提供の一般教養科目（16単位）をする。初年次学生については、入学直後の前期に英語科専門科目に加え、教養科目として「キリスト教概論Ⅰ」、「表現技法」、「コンピュタリテラシー」を必修として履修することになっている。

数年前まで、英語科では入学してくる学生たち、すなわち新入生に対する科目のうち、とくに総合教育系が提供している「キリスト教Ⅰ・Ⅱ」、「表現技法」、「コンピュタリテラシー」を、本短期大学で学ぶ学生に必要な教養科目として導入教育的位置づけをしていた。「キリスト教概論Ⅰ」では、建学の理念を支えるキリスト教の理解、「表現技法」では、明確で適切な表現力を身につけ、理路整然とした論述力を養うことを通し、批判的思考力を鍛え、「コンピュー

「リテラシー」では、情報リテラシーを育て、大学生活でコンピュータを日常的に使いこなせるための基礎と情報化社会へ参画する姿勢を学ぶ。これらの科目がいわゆる「初年次教育」的役割を担っていると認識されていた。しかし近年、学科内外から最近の学生に対し、（特に英語科の学生を授業で担当している専任教員や非常勤教員から）さまざまな要望が聞かれるようになってきていた。中でも特に〈大学生としての心構え〉や〈受講のマナー〉、〈生活習慣を整える意識〉、〈目的意識〉などを中心に、基本的教養あるいは基礎学力ではカバーしきれない素養に関するものが多く寄せられるようになっていた。新入生の、特にソーシャル・スキルが十分でないことで、従来の本学の教育システムと入学者の乖離が大きくなってきているのである。

このことから、英語科では、従来頼っていた教養科目では扱っていなかった、いわゆる大学生活への移行をスムーズに促す導入教育の必要性を感じた。そこで、英語科ではこれまでの導入教育の補完を目指し、2年間の準備期間を経て、2012年度前期に初年次教育の科目として「フレッシュマン・セミナー」を開設した（城間 2013）。

(2) フレッシュマン・セミナー開設初年度

授業の設計にあたっては、社会人基礎力の涵養に向けたオリエンテーション（方向付け）と、アクティブラーニングが貫かれたものにする 것을目標とした。

社会人基礎力とは、経済産業省が2006年までに取りまとめた「職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という3つの力と、それらを構成する「主体性」「課題発見力」「発信力」といった具体的な能力要素のことを指す（経済産業省 2010）。高等学校における学習と大学でのそれとの間の大きな違いの一つは、物事に対する明確な答えがあるかないかの違いである。つまり、生徒たちは、高校までの命題知の習得を中心とした学びから、活用知、実践知中心の学びへと転換しなければならず、そのためには能力要素として挙げられている「主体性」「働き掛け力」「実行力」「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」などが重要であることを知る必要がある。

アクティブ・ラーニングとは、「能動的な学習」のことで、授業者が一方向的に知識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究やPBL（Project/Problem Based Learning）、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習を取り込んだ授業の総称である（谷口、友野、2011）。医学や工学、教育学など、様々な分野の学問教育に取り入れられてきているが、加えて近年はより効果的な初年次教育の実践を目指す試みの中で採用されてきている。フレッシュマン・セミナーにおいても、毎回の授業でアクティブ・ラーニングの方式を取り入れた。

実施1年目（2012年度）は、学内の評価、学生からの評価ともおおむね好評であった。特に学生からは、「大学生活に対する不安が解消された」、「グループで学んだり作業したりすることの大切さが分かった」など、短期的視点では授業の目標がほぼ達成できたといえよう。

(3) フレッシュマン・セミナー2年目を控えて

実施1年目を終えての反省点として最も重要なものをあげるとすれば、初年次教育を「フレッシュマン・セミナー」という科目のみで請け負っている意識が強すぎたことであろう。本来であれば、あるいは理想的には、初年次教育の特質上、その実施は当該大学の「初年次学生にとっ

て必要な資質」を全学的なコンセンサスを以って学科や学部を超えて横断的になされなければならない。そこで大学で学生を取り巻く環境の様々な部分がいわゆるラーニング・コミュニティを構成する重要な要素であることを認識し、そのダイナミックな活用を目指したのが、2年目の英語科初年次教育だった。

4. 初年次教育とラーニング・コミュニティ、協同教育

2013年度（開設2年目）のフレッシュマン・セミナーをどのように改善するか検討する中で、いくつかの研究を行ったが、その中で「ラーニング・コミュニティ」と「協同学習」の概念が必要であるとの考えに立つようになった。

(1) ラーニング・コミュニティ

Cross (1998) が指摘するように、ラーニング・コミュニティといっても単に共通科目を学ぶ学生たちに提供される、構造のゆるいプログラムもあれば、様々な学問領域からなる教員のチームが統合化された教科を担当する強く組織化されたもの、あるいは学生たちが寮で共同生活を送るものまで様々であるが、Cross による広義 (groups of people engaged in intellectual interaction for the purpose of learning) は適切であろう。拙訳すると、「学びを目的とした学生がグループで知的な相互作用関係を築いている状態」となる。また、大学を想定したより具体的な定義としては、以下のようなものがある (Smith et al., 2004, 加藤 (2007) による和訳)。

ラーニング・コミュニティは、二つ以上の科目を意図的につなげた、あるいは一まとめにした教育課程に関する種々のアプローチである。科目群は多くの場合学際的なテーマや課題にそってつなげられ、同じ学生の集団を履修させるものである。ラーニング・コミュニティは学生の時間、単位、そして学ぶ経験を再構造化することによって、学生・教職員・分野すべてにまたがる共同体をつくり、学生・教員・分野をまたがって学びを広げ、つながりを作る。最大限に利用されると、ラーニング・コミュニティは、有効なペダゴジー、能動的な参加と思考が実践される場になる。

さて、大学の授業においてラーニング・コミュニティ (LC) をデザインする利点は何だろうか。加藤 (2007, p. 3) は以下のように表現する。

LC が注目されるようになった理由は、関係性と意味を提供し強化する性質をこのプログラムが持っており、学習に文脈を提供するからである。ここでいう関係性とは、学生と学生、学生と教職員、教職員と教職員、分野と分野の関係性であり、大学空間に身を置く個人と個人、個人と社会空間 (コミュニティ) との関係性である。LC は、学生に学習と生活との関係性と、学生と生活する社会空間との関係性を与え、教員には、教員と教員との関係性、ひいては教員と大学空間との関係性、教員の専門分野と他の教員の専門分野との関係性を与えることによって、学ぶことの意味を与え、そこに関わるすべての人間に動機付けを与えるのである。

例えば、具体的な例として、智原（2013）は、「初年次教育の現状と未来」の中で、教育改善の一方策として大阪女学院短期大学・大阪女学院大学の初年次英語・教養教育においてラーニング・コミュニティが構築・活用され、学習効果を上げることができた例を紹介している。その中で、教員間の連携が科目の同異を問わずに図られていること、学生は同一クラス内の学生にとどまらず同課程を受講している他のクラスの学生とも同じ問題意識を共有することで、テーマに関わる全学生および教員、さらにプログラムを熟知する全職員が同一の問題意識を共有してつながる学習共同体が形成される過程が紹介されている。また、智原はラーニング・コミュニティの存在理由として「学生がテーマ学習の内容と自分を取り巻く社会との関係に問題意識を持つことにより『学ぶ』意義を見出すこと」としている。

(2) ラーニング・コミュニティと協同学習

Cross（1998）はラーニング・コミュニティのコンセプトを、協同学習をベースに論じている。知識は、Bruffee（1995, p. 9）が指摘するように、社会を検証することによってではなく、知識を有する仲間のコミュニティでお互いに協議しながら構築・維持される。さらにラーニング・コミュニティの効果のみならず必要性までを訴えており、なぜなら人は仲間と共に協力・相互依存しながら知識を構築するからだ、としている。

Dillenbourg（1998）によると、協同学習の最も広い（しかし不十分な）定義は、2名以上の者が一緒に何かを学ぶあるいは学ぼうとしている状況である。この意味を具体的に解釈すると、「2名以上」とは、ペア、少人数（3～5名）、クラス（20～30名）、コミュニティ（数百～数千人）、社会（数千～数百万人）など様々である。「何かを学ぶ」については、授業について行く、教材を学ぶ、問題解決などのような学習活動を行う、生涯にわたる仕事から学ぶ、など。「一緒に」については、対面の場合があり、コンピュータが介在する場合がある。同時であるかどうか、頻度が高いかどうか、真に共同努力がなされているかどうか、作業が系統的に分担されているかどうか、様々な場合が考えられる。これらの組み合わせによって、協同学習の定義が広範に及ぶものであることを論じている。

関田（2004）のイメージする「協同」は、「個々のグループメンバーが、グループの全員が一つの目標を達成するために、共になくてはならぬ存在として活動し合っていく」こととし、グループ構成員が互恵的な相互依存関係を形成することが必然となるような目標を共有している場合、そのグループは協同していると見なすという。単に人を集めてグループを作るだけでは協同とは呼べないのである。関田は、自分の学びが仲間の役に立つ。同時に仲間の学びが自分の役にも立っている、という表現をしている。

協同学習は、社会性を持った学びの形態であると言えよう。その意味においては、社会人基礎力の涵養を目指し、大学という、新入生にとって未知の社会へと誘うべき本学科の初年次教育にとって、協同学習を意識した学習環境づくりはもともと不可欠であったのだと言える。

4. 2013年度「フレッシュマン・セミナー」

本稿冒頭の Tinto による指摘の通り、1年目のフレッシュマン・セミナーは「add a course（科目の追加）」戦略の域を出るものではなかったことが、反省点の一つにあげられる。初年次教育は総合的教育プログラムであるべきだが、1年目の実施体制では、初年次が抱えるである

う種々の問題に対する対処療法、良くて予防療法に留まっていたのではないだろうか。大学初年次学生が大学に適応できるか否かという問題を根本から考えるのであれば、初年次が身を置く学習環境を総合的に巻き込んだ、ダイナミックなプログラムにすべきである。

2013年度（2年目）のフレッシュマン・セミナーは、本学で起こった新規の教育プログラムや既存プログラムへの新しい取り組み、また本学の事務組織の改組もあって、結果として昨年度と比較するとダイナミックな初年次教育のスタートを切ることができた。

今年度前期の本学教育プログラムと英語科初年次教育の関連付けを考えたい。城間（2013）で紹介したように、本学英語科の入学生に対する初年次教育のスタートは、入学前教育であるBridge Program であるが、ここでは入学式（4月1日）以降の教育プログラムの初年次教育の関連を述べる。これによりダイナミックな学習環境、初年次教育に関するラーニング・コミュニティの形成が確認できよう。

(1) 学生生活オリエンテーション（4月2日）

概要：入学式の翌日、午前9時から午後4時30分のスケジュール。保育科入学生、沖縄キリスト教学院大学（四大）英語コミュニケーション学科（英コミ科）入学生も共同実施。入学生にとって、これから自分が身を置くキャンパスで場所と時間を共有する他学科の入学生たちを目にするのはこの学生生活オリエンテーションが実質的に最初であろう（入学式は新入生以外の参加者も多く、またあくまでも「式」なので、そのような実感は得られないはずだ）。学生支援部長の開会の言葉に始まり、以下の講話や説明が続く。「建学の精神について」（宗教部長）、「就職・資格に関すること」（キャリア支援課長）、「国際平和文化交流センターについて」、「アンケートの説明」（カウンセラー）、「ソーシャルメディア利用について」（企画推進課）、「学生課より」、「学生会紹介」、「サークル紹介」、「各学科・教員紹介」、「アドバイザー・グループ アワー」。

初年次教育との関連：上記のトピックはすべて、フレッシュマン・セミナーの授業でも取り扱う内容である。学生生活オリエンテーションがタイトなスケジュールで浅く広く学生生活全般を、どちらかというと一方向的に伝える一方、フレッシュマン・セミナーでは各トピックについて対話やアクティブな演習も交えながら学ぶ。そのため、英語科新入生にとっては、学生生活オリエンテーションがフレッシュマン・セミナーの授業内容の一部についてイントロダクションのような役割を担っていることになっており、授業内容の定着にも貢献していると思われる。

(2) アカデミック・オリエンテーション（4月4日）

本学では、伝統行事であった5月中旬に渡嘉敷島で2泊3日を過ごす「新入生オリエンテーションキャンプ」を発展解消、今年度より「新入生オリエンテーション」として英語科・保育科合同で開催されることになった。参加対象人数は英語科新入生95名、保育科新入生102名、各学科2年次リーダー、短期大学教員、その他の合計約240名である。新入生オリエンテーションキャンプの目的である3本柱（建学の理念についてのオリエンテーション、アカデミック・オリエンテーション、人間関係を深めるためのオリエンテーション）を継承し、本学キャンパス内で1日がかりのプログラムとして実施。

概要1：午前9時から9時40分は「建学の精神を学ぶ」として、開会礼拝と講演会が持たれた。講演会については、ここ数年渡嘉敷島のキャンプでも建学の精神オリエンテーションの一環として行われていた、金城重明先生（第3代学長）の戦時中の集団死に関する体験とその後のキリスト教徒の出会いについての講話である。

初年次教育との関連：戦争の悲惨さ、平和の大切さ、キリスト教の「生かす教育」など、本学の建学の精神について学ぶという点では、自校教育としての役割を担っている。また、新入生は入学前教育の一環として金城先生著の「集団自決を心に刻んで」（の一部）の感想文を課されていた。建学の精神に関わる事柄について入学前に本で読み、入学直後に講演を聞くことで、自校教育について堅固なスタートを切ることができる。

概要2：9時50分から12時20分までは、各学科に分かれて「アカデミック・オリエンテーションI」が実施された。英語科では「TOEICについて」と「TOEICの実施」である。予定では、まずTOEIC担当教員からTOEICの概要が説明され、その後に実際のTOEIC受験が実施、という計画だったが、プログラム全体の時間調整等で説明の時間が大幅に削られてしまった。TOEIC受験の意義をより強く感じてもらうためにも、概要説明の時間を十分にとることが次年度に向けての課題の一つである。

初年次教育との関連：英語科の学生にとって、TOEICは単に在学中の英語力の伸びを測るための、入学時と卒業時の2回の受験を義務付けられているだけのものではない。英語科のカリキュラムの中心は、国際社会でのコミュニケーションツールとしての「使える英語」である。学生には、TOEICの高得点をゴールに据えるのではなく、TOEICで証明される英語力が、各自が持つ目標や夢の実現に向けて有効なツールになり得る重要なものとして認識するよう指導される。

概要3：12時25分から13時25分の昼食時間は、総合教育系のこれも含めては昼食時間だが、今回のプログラムでは、この時間を含めて「人間関係を深めるためのオリエンテーション」を置いたところに大きな特徴があった。昼食はキャンパス中央の中庭にてバーベキューをするのだが、新入生はアドバイザー・グループ^{注1}ごとに一つのコンロを割り当てられ、与えられた条件（準備された材料、器具と種々の調味料）で課題（調理法や味、盛り付けを工夫して1皿仕上げ、提出）をクリアするよう告げられる。各グループから提出された作品は学長をはじめとする審査員団によって審査された。一通り昼食を済ませ13時30分に新入生たちはチャペルに移動。優勝したグループの表彰と共に、14時まで「教養教育を学ぶ意義とは」と題する振り返りと講義が行われた。新入生たちは、与えられた条件や課題を聞いた時どう思ったか、情報収集をどうしたか、だれと相談したか、どのような工夫をしたのか、などを問われた。その応答はリアルタイムでPCに入力され、チャペル前方のスクリーンに投影された。これらの問いかけと自分たちの反応がファシリテートされながら「教養教育を学ぶ意義」に結びついていく様子が提示された。

初年次教育との関連：前半のセッション（バーベキューと課題）では、自己開示、課題解決、協同学習、話し合い、情報収集など、初年次教育として扱うべき重要なトピックが多く確認された。顔を合わせて間もない仲間たちと、課題の解決に向けて自分の考えを発し、相手の意見を聞き、課題を洗い出し、与えられた条件と集めた情報を考えながら話し合っ

課題の解決に向かわなければならない。「グループで働く力」社会人基礎力では12の「力」のうちの一つにも挙げられ、実社会でも多くの企業が求めている素質であるが、多くの大学生が苦手の自意識を持っている。フレッシュマン・セミナーでも取り扱うトピックであるし、できるだけ多くの回でグループワークを取り入れることにしているが、入学直後にアクティブな形で体験するメリットは非常に大きい。

概要4：学科別「アカデミック・オリエンテーション」の第2部である。英語科では新入生と先輩数名のスピーチを聞く機会を持った。その後、キャリア支援課による講話「就職について」を実施した。

初年次教育との関連：一緒に入学した仲間の目標や課題などを改めて聞くことにより、自分を見つめなおし、新たな目標や課題の設定と向き合うことが期待される。また、先輩の体験談とアドバイスからは、入学直後の時点では霧がかかってよく見えない2年間の道のに一定の見通しがつくことで、入学時の不安の解消につながる。

(3) 月曜礼拝（毎週月曜日 9：50～10：30）

概要：本学キリスト教諸活動の中で最も重要なプログラムとして設けられている。全教職員と学生が積極的に参加することを強く求められている。週のはじめに讃美歌を歌い、祈り、聖書の話や進行の体験を聞くことで、思いを新たにす貴重な時とされている。

初年次教育との関連：キリスト教と建学の精神に対する理解を深めることは、帰属意識を高めるとともに、今後の学生生活への意義を見出すためにも重要である。

(4) 留学セミナー（4月11日）

概要：国際平和文化交流センター主催で行われた。留学に興味のある学生が対象。本学協定校であるPortland Community Collegeに留学した学生からはESOL（English for Speakers of Other Languages）の授業の様子やその他の国際交流の体験談が、カナダ・トロントに語学留学をした学生から語学学校と現地でのインターンシップの体験談が、センター職員より本学留学制度と奨学金についての説明があった。留学には「資金」「語学力」「タイミング」などが重要、自分にとってベストな留学を実現できるように留学の目的をしっかりと持ち、計画的に学生生活を送るようアドバイスがあった。「留学ハンドブック」と「留学プランニングシート」の配布も行われた。

初年次教育との関連：英語科の学生には、留学希望者が多い。参加した新入生にとっては、漠然とした憧れから、具体的な体験談やアドバイスを聞くことで、今後の学生生活を計画的・意識的に過ごす指針の一つになったようである。

(5) スポーツ・デー（4月20日）

概要：毎年4月下旬の土曜日に、学生会の企画運営で行われる。現状は新入生を対象としたプログラムで、学生会のリードのもと、アドバイザー・グループ同士でスポーツを競い合う。今年度は、体育館でバレーボールが行われた。また、ここ数年の慣例としてプログラム終了後にバーベキューパーティーが行われている。

初年次教育との関連：アドバイザー・グループの結束を固めるとともに、グループで動くこ

とでグループワークと自分を意識することができる。また、他学科の新入生とアクティブに関わることで、人と関わる楽しさの実感と大学への帰属意識の高まりが期待できる。

(6) キリスト教講演会（4月25日）

概要：前期と後期にそれぞれ設けられるキリスト教週間の中心となる企画。今年度前期は仲里和花先生（沖縄YWCA会員、本学非常勤講師、日本基督教団首里教会会員、本短期大学英語科34期卒業生）が「共に生きる世界を実現する」という題目で講演をされた。

初年次教育との関連：講演の内容が新入生の学生生活へ示唆を与えてくれるのはもちろんのことだが、フレッシュマン・セミナーとの関連では、講義ノートの取り方の実践演習の場として学生を送り出した。ノートをとることで授業が「学び」の場となる（矢島、2011）。フレッシュマン・セミナーでは、大学の授業を積極的に受講する方法として、ノート・テイキングの演習を取り入れている。講義内容の理解に役立つのはもちろんのこと、ともすれば退屈に感じることもあり得る大学の講義を能動的に受講する方法でもある。ノート・テイキングを1、2度練習したからといって多くの学生が自主的にノートを取るようになるわけではない。機会あるごとにノートをとるよう指示することで、メモ取り、ノート作成が学生の習慣になることを目指している。

(7) English Department Assembly（英語科集会）（5月16日）

概要：今年度からの英語科の新しい試み。カリキュラムの自由度の高い英語科では、これまでアドバイザー・グループで、または学科全体で集まる機会が少なかった。今年度より年に数回、前期に2回の開催を目標としてEnglish Department Assembly（英語科集会）を開始。第1回目はアドバイザー・グループ単位で英語を用いたパフォーマンスを課題とした。英語で聖書の内容を人形劇にしたグループや世界各国の紹介を英語プレゼンテーションにまとめたグループ、チーム内にいる留学生の母国の舞踊を英語劇に仕立てたグループなど、印象的なパフォーマンスがいくつか見られた。

初年次教育との関連：専門教科である英語を活用する機会。机上の英語学習から離れ、アクティブかつ主体的に英語の活用を考える機会となった。また、共に課題に挑戦することで、仲間との人間関係を深める機会にもなった。

(8) 進路セミナー（6月12日）

概要：学生支援部（学生課、キャリア支援課、国際平和文化交流センター）による事業。昨年度までは10月の開催だったが、早期の動機付けを目的に、今年度より前期の6月に開催。また、昨年度までは独立したキャリア開発部の事業だったため、「就職」が主要内容だった。今年4月の事務組織の改変で学生支援部の事業となったため、「就職」「進学」「留学」「女子学生のキャリア」に幅広く焦点を当てた、様々な学生の進路に訴えかけるプログラムになった。

初年次教育との関連：主題である「キャリアを考える」はもちろんのこと、フレッシュマン・セミナー関連でもさらに2つの課題を与えた。1つは上記「キリスト教講演会」でも触れたノート・テイキング、もうひとつは「話し合い」である。参加する学生たちには、1. 進路を考えるプログラムであること、2. 学生支援部の職員が懸命にプログラムを運営し

てくれていること、また特に3. 午後のセッションでは社会人として活躍している先輩3人を迎えてのパネルディスカッションが行われること、を考えて自分たちのために労を惜しまずサポートをしてくれる人々に敬意を払うことを表現するには、どのような服装で望めばよいかを考えさせた。英語科では単にリクルートスーツ着用と指定することはせず、フレッシュマン・セミナーの授業内で前もって話し合いをしてもらった。話し合いが熱を帯びて疲れてくると、学生たちは「誰かに一律に決めてもらうこと」がいかに楽であるかを感じたようである。フレッシュマン・セミナーでは第4回目の授業「大学生とは」で「自由」と「責任」のバランスのとり方について考える。授業で学んだ「高校生と大学生の違い」を、「リクルートスーツ（＝制服）と自分なりに敬意を表現する服装の違い」を考えることで、アクティブ・ラーニングへと昇華することができたと思う。

(9) 授業評価アンケート（7月8～13日）

概要：毎学期末近くに実施される。昨年度改良が実現した授業評価アンケートでは、学生を「自律/自立学習者」を目指す者として作成された。3つの大項目（学習態度の自己評価、学習環境の評価、改善のための提言）からなる。

初年次教育との関連：フレッシュマン・セミナーで授業評価アンケートについて説明をする際には、学生たちが成績を評価される立場であると同時に、授業を評価する立場でもあり、さらには自分が自律/自立学習者であったかどうかを自己評価する責任も有する旨を知ってもらっている。評価する立場のものは評価される者と同じくらい、場合によってはそれ以上に真剣に臨まなければならない。そのような意識で受講するように指導している。

(10) 進学（編入学）説明会（7月12日）

概要：学生支援部学生課主催。本来は進学（四年制大学への編入学）を予定している2年次対象だが、1年次の参加も可能である。本学からの指定校推薦制度、その基準、また一般編入に関する情報提供を行っている。

初年次教育との関連：新入生にも積極的な参加を勧めたところ、例年と比較して多くの新入生の参加が見られた。中でも指定校推薦を受けるためにはGPAが一定基準を満たさなければならないことを知り、それまでの受講態度を大幅に改めた新入生が少なからず見られる。フレッシュマン・セミナーでも大学における成績評価の説明をする際に、2年次になってからGPAをあげようと試みても難しいことを何度も説明している。結果として、フレッシュマン・セミナー開設以前に比して成績評価を考えた履修計画（自分にとって無理のない時間割が組めるように履修するなど）をする学生が増えている。

5. 初年次学生のためのより良い学習環境構築に向けて

初年次教育に関する研究の中で、冒頭で紹介したTintoの厳しい指摘に出会えたことは幸運であった。フレッシュマン・セミナーの実施1年目は、実施する側こそがフレッシュマンであり、暗中模索、五里霧中の地点からのスタートであったことは否めない。無論、初年次教育の特質上、その実施はその大学の初年次学生にとって、その大学ならではの環境の中で必要な初年次教育に関する全学的なコンセンサスのもと、様々な垣根を超えて横断的に行われるべきものである。

学内で行われている様々なプログラムは必ずしも初年次対象を第一の前提としてデザインされたものではないかもしれないが、その様々な創造的取り組みの一つひとつが初年次教育のパーツとして機能するはずである。初年次教育担当者こそが、初年次が陥りがちな近視眼的行動、コミュニケーション不全を克服して、全学的なグループワークとしての初年次教育を目指さなければならない。

注記

1. 本学にはアドバイザー制度があり、入学時に決定する担当教員（英語科の場合は英語科専任教員と総合教育系専任教員）と、学生生活や就学、進路などの相談はもちろん、人生や宗教、社会の諸問題などなんでも気楽に話し合える関係を結ぶことを目的としている（沖縄キリスト教短期大学 2013年度学生便覧より）

参考・引用文献

- Bruffee, Kenneth A. Collaborative Learning. 2nd ed. The Johns Hopkins University Press, 1999.
- 智原哲郎（2013）「ラーニング・コミュニティ活用による教育改善」『初年次教育の現状と未来』世界思想社 pp.225-236
- Cross, K Patricia. “Why learning communities? Why now?” About campus 3.3 (1998) : 4-11.
- Dillenbourg, Pierre (1999) What do you mean by collaborative learning?. *Collaoborative-learning : Cognitive and Computational Approaches*. pp.1 -19. Oxford: Elsevier
- 加藤善子（2007）「ラーニング・コミュニティ・教育改善・ファカルティ・ディヴェロプメント」『大学教育研究』16、1 -16
- 関田一彦（2004）「協同学習のすすめ」『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部 pp.57-106
- 城間仙子（2013）「アクティブ・ラーニングと社会人基礎力を柱にした「フレッシュマン・セミナー」」『沖縄キリスト教短期大学紀要』41、pp.81-89
- Tinto, Vincent, “Taking Student Success Seriously : Rethinking the First Year of College.” Ninth Annual Intersession Academic Affairs Forum, California State University, Fullerton, 2005.
- 矢島 彰（2011）「ノートのととり方」『大学学びのことはじめ 初年次セミナーワークブック』ナカニシヤ出版 pp.44-45